

光泉堂月例会が始まったのは、一九八九年（平成元年）八月六日の第一日曜日からであった。この会は、根元道神界コースをめざす求道者の集まりとして定着することになったが、始まりは必ずしも正式な月例会として発足したわけではなかった。

大國光道と白山里子が、東京小平市にあるアパートから転居した埼玉県上尾市にある家は、二人で生活するだけであつた。光道は、その家でタイプを打つて「日本の対応ができるような家ではなかつた。光道は、その家でタイプを打つて「日本の神々」を出版した。簡易製本のささやかなその本を読んでくれる人があり、縁ある人が光道に接触を求めてきはじめていた。そうした人々と正しく対応するためには、定期的な会をもつようにしないと、いろんな意味で都合が悪くなつてきた。

むやみやたらに電話をかけてこられても困るし、突然家に押しつけて来られても、一人で家にいて仕事をしている身には十分な対応ができないし、手紙のやりとりをするにも限度があつた。そのため丹沢白山のキクリヒメのミタマの持主が接触してきて、自分のグループを連れて来たいと言ひ出したとき、近くにある福祉会館の応接室を借りて対応したのが、月例会の始まりであつた。

このころ光泉堂の仕事を手伝う猿田あゆみ（仮名）という若い女性が一人い

て、本の広告のことや書店回りのことなどをやってくれていた。彼女は一年間の水行を終えて、光泉堂の向かいにあるアパートに引っ越して来ていた。大國光道と白山里子とその若い女性の三人と、丹沢白山のグループ三名の合計六名が、第一回光泉堂月例会の出席者であった。光道以外はすべて女性という始まりであったが、この会は続かなかった。というのも外来のグループは霊界宗教の枠を脱しきれず、現世利益中心の霊能願望が強い人たちだったからである。

そのグループにはまだほかのメンバーがあつて、月例会の頭数はさらにふえそうな気配であつたが、彼らはよその宗教団体に所属していて、そちらと切れていくわけでもないし、神界行に取り組む姿勢も感じられなかったため、光道は彼らとの接触を断つて自分の行道を守ることにしたのだった。大事な神行も控えていて、妨害にかき回されることを恐れたからであつた。

しかし、せっかく始まつた月例会をそのまま閉じるのも芸のないことだったので、二冊目の「新世紀の神話」で座談会の正式な案内を出すことにして、それまでの間は予行演習をするつもりで、内輪の三人だけの会合が続けられていったのだつた。

キクリヒメにかかわりのある東京のグループが、そうして光道につながろうとしていたところ、それに平行するようにして京都のグループの動きも始まつてい

た。こちらのグループの中にもキクリヒメのミタマの持主がいたのであるが、光道につながろうとするキクリヒメの動きには、焦りを越えて異常なものすら感じられるほどだった。キクリヒメのトップのミタマであった大分のカシキヒメ夏織との関係が失敗に終わったことで、キクリ神界が打開策を模索している動きがそこにはあったのだろうと思われる。

三人の核を作って求道生活に取り組んでいた京都のグループが、光道に初めて接触してきたのは、平成元年の夏のことであったが、その事の始まりは、光道が「日本の神々」の広告を京都新聞に出したときにまでさかのぼる。この広告が出たのは六月二十日の紙面であったのだが、それを見て本の注文をしてきた吉国峰夫（仮名）という男性から、間もなくして二冊の追加注文がきた。光道は郵便振替用紙の通信欄に記された短い文章に、他の人々にない特殊なものを感じた。

「日本の神々」もう二冊お願いします。とてもすごく、たてようのない内容に驚いております。

ます。他の書ありますればお教え下さい。「みそぎ」は読ませて頂いております。

わずかこれだけの文面であつたのだが、光道はここから強烈な意思表示を受け取って、記憶に深く刻みつけたのであつた。本を送って少し過ぎた八月の初めのこと、京都の小学校の教師から一通の手紙が光泉堂に舞い込んだ。本の注文をしてきた人物ではないので、先に追加注文した人物から回されて読んだと推察されたが、その文面には、神道攻究会とかかわりがあることや、「日本の神々」の読後感、あるいは自分の求道の遍歴のことが簡潔に記されてあつた。字が男性らしからぬ清筆なので、どういう人物か不思議な気がしたのであつたが、その字は同行の女性によって清書されたものであつたことが、後になってわかった。

後略